二重目的語構文の構造

小倉敏博

英語はその歴史の過程において名詞の屈折語尾をほとんど失い、それが表わしていた文法関係を語順および前置詞句による迂言形により表わすことになった。その際、語順と前置詞句のどちらによってもほぼ同じ関係が表わせるという事態が生じたために、同じ文法関係を示す表現が併存する複雑な体系を現代英語に与え、その共時的考察を困難にしている。そのような表現の一例として、次の(1)、(2)のように、それぞれaとbとの間に対応関係を持つ文が挙げられる。

（1）a. John gave Mary a doll.
　　b. John gave a doll to Mary.
（2）a. John bought Mary a doll.
　　b. John bought a doll for Mary.

初期の生成変形文法は、これらのaとbの対応関係を変形規則でとらえようとした。一般的にはbの型の文を基底形として、(3)のような与格移動規則がたてられる。

（3）$X-V-NP-\begin{Bmatrix}\text{to}\\ \text{for}\end{Bmatrix}-NP-Y$
　　1　2　3　　4　　5　6
　　$\rightarrow 1-2-5-3-\phi-\phi-6$

この規則は魅力のあるものであるが、その後の研究で、その一般性が疑問視されはじめた。次の(4)、(5)のように、どちらか一つの型しか持たない動詞が存在する。[1]

（4）a. *He suggested us a new plan.
　　b. He suggested a new plan to us.
（5）a. The shirt cost me ten dollars.
　　b. *The shirt cost ten dollars to me.

さらに、同じ動詞でも(6)のように、ふつうは一つの型でしか使われない場合がある。

(6) a. The problem is giving John a headache.
　　b. *?The problem is giving a headache to John.

このような現象を考慮に入れ[2]、(3)のような変形規則は存在せず、(1)、(2)のaとbのどちらも基底部に存在する型として生成し、その意味上の対応関係は語彙余剰規則でとらえるという立場が現われ優勢である。本稿でも一応その立場をとるが、その事柄自体には立ち入らず、(1)、(2)のaのように動詞が二つの名詞句を従える、いわゆる二重目的語構文の統語構造はいかなるものであるかについての最近の諸説を検討し、その不確定さを指摘することとする。

一

二重目的語構文の統語構造を考える際に考慮に入れるべき統語現象を見てみよう。

二つの名詞句のうち、動詞の直後に置かれるいわゆる間接目的語は、wh 句移動変形で取り出すことができないと言われる[3]。

(7) a. *Who(m) did John give the book?
　　cf. b. Who did John give the book to?
　　c. To whom did John give the book?

それに対して二番目の名詞句、いわゆる直接目的語は(8)のように取り出すことができるとされる。

(8) What did John give Bill?

しかし、(7)aの文法性の判断には問題がないではない。ストウェル（Stowell, 1981）は次のような非文法性の段階を指摘している。

(9) a. ?*Who did Wayne send a telegram?
　　b. ?*Which girl did Debbie give a record?

(10) a. *Whose mother did Greg bake a birthday cake?
　　b. *Which girl did Paul get a new dress?

(11) a. **Who don't you begrudge his wealth?
　　b. **Which man did this shirt cost ten dollars?

動詞が give や send などの場合は容認可能とする者もいるのである。ブラウンとミラー（Brown and Miller, 1982, p. 177）は(12)をはっきり文法的とする記述をして

いる。

(12) Who did John send the book?

しかし(13)は不可であるとする。

(13) *Who was the book sent by John?

ナイダ (Nida, 1966) は次の(14)を可能であるが、前置詞を使った型の方が好まれるという記述をしている。

(14) Whom did they give the watch?

wh 句移動による間接目的語の取り出しを可能とする者も、より複雑な構造からの取り出しは認めないということのようである。[4] ストウエルは次のような例を挙げる。

(15) a. *Who did Carol say that Wayne sent a telegram?

b. *Which girl does John believe that Debbie gave the record?

関係節変形でも間接目的語の取り出しはおこなわれないとされる。

(16) *The girl who I gave the book is here.

ただし、ここにおいても可能であるとする記述もある。カーム (Curme, 1931, p. 116) は(17)のように言うことには問題がないとしている。

(17) Mr. Wells, whom competent critics have given a niche among future classics, ...

次の(18)を例文として挙げている文法書もある。[5]

(18) The girl {(to) whom we gave the message / who we gave the message to} is not here.

次のような変形で間接目的語を取り出せないことに対する判断のゆれは少ないようである。

(19) 'tough' 移動変形

*The girl is hard to tell a story.

(20) 分裂文変形

*It is this student that he gave the book.

先に(8)で見たような直接目的語の取り出しを不可とする者もいて事は複雑である。[6]

(21) a. *The pipe tool I sold Jerome was rusty.

b. *The book which I was reading Susan is on the table.

これらの事実になんらかの説明がされなくてはならない。

二重目的語構文の分析を更に困難にする現象は受動態である。ここでも話者により方言により文法性の判断が

微妙にくいちがうのである。関連する文を以下に挙げる。

(22) a. The book was given to Mary.
　　b. Mary was given the book.
　　c. The book was given Mary.

(23) a. The book was bought for Mary.
　　b. Mary was bought the book.
　　c. The book was bought Mary.

(22)a、bと(23)aを文法的とすることにはゆれはないようである。(22)cと(23)b、cについては、(22)cは可であるが(23)b、cは不可とするもの、(22)cは可であるが(23)cは不可であり(23)bについては疑わしいとするもの、(23)bは可だが(22)c、(23)cともに不可と判断するものなどがいる。(22)cを不可とするものも、次の(24)のように代名詞が過去分詞の後に来ると認めることがある。

(24) The book was given her.

また(23)cはふつう不可とされているが、[7] (25)を認めている者もいる。[8]

(25) That bottle of Glen Grant was bought me by John.

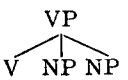
これらの判断の違いが、何に起因するものであるかに対してもなんらかの説明が与えられなくてはならない。

二

さて以上に見たような現象のどこまでが統語構造に由来するものであろうか。文の容認可能性には統語構造以外に、意味論上、語用論上のさまざまな制約が入り込んでくるが、まずは言語に内在する形式的側面をしっかりおさえておく必要がある。

二重目的語構文の句構造はどのように分析されるであろうか。アメリカ構造言語学流の言い方をするならば、give John a book の直接構成素は何かということである。一番、素朴であり、また多くの文法家が考えていた構造は(26)のように三つの構成素が平板に並んでいるものだと思われる。

(26)



しかし、このように分析すると、句構造自体からは、第一節で見たような統語現象は説明されないと言えよう。

どちらの名詞句もwh句移動変形で移動することをさまたげる要因はなさそうである。受動変形に関しては、変形で移動するものは動詞の直後の名詞句であるとする旧来のわく組をとると、直接目的語が移動することが説明されなくなるし、名詞句はどこにあっても自由に移動しうるという最近のわく組をとると、どちらの名詞句も等しく移動することが予測されてしまい、いずれにしても先に見たような分布の説明がつかない。そこでカリカバーとウェクスラー（Culicover and Wexler, 1977）によって次のような階層構造が考えられた。

(27)

彼らは、与格移動変形は存在するものとして論を進めているので、(27)はその変形が適用された後の派生構造ということになる。前置詞句のうしろにあった名詞句が動詞にチョムスキー付加[9]されると考えている。そしてV→V NPのような基底部では生成されない構造は、凍結されて、その節点（node）自体、およびその節点に支配されている要素は、再び移動することはないという仮説（Freezing Principle）を立てる。そのことにより、第一節で見たような間接目的語の移動が阻止されることが説明される。一度動かされた間接目的語は二度と移動しないとする。しかしこの考え方にはさまざまな反論がある。まずこの説が与格移動変形の存在に依存しているために、次のような弱点が指摘される。対応する前置詞句付きの構造がなく、変形で派生したとは考えにくい(28)のような文の間接目的語も(29)のようにwh句移動変形で取り出すことができないことが説明されないのである[10]。

(28) The last hand cost someone a steak dinner.

(29) *Who did the last hand cost a steak dinner?

また第一節で見たように間接目的をたずねる疑問文などを認める人がいることの説明もなされない。さらに、より大きな問題点は、凍結されているはずの名詞句が自由に移動して、(30)のようないわゆる間接受動態ができることの説明がつかないことである。

(30) John was given a book about poker.

第一の点に関してストウェル（Stowell, 1981）は、変形に依存せずに基底部から(27)のような構造を考え、似たような説明をする。彼は基底部で動詞へ間接目的語が編

入（NP-incorporation）されると考える。ちょうど put off のような（形態論上の）動詞と不変化詞が、統語論上の動詞を構成するのと同じようにみるのである。限られた不変化詞の場合と違って、文法範疇の名詞句が編入されるとみるのは不自然に思われるが、ストウェルがこのような構造を考えるのは、語の一部が変形によって取り出されることはないという前提に立って、編入されて語の一部になっている間接目的語が wh 句移動変形などで移動することはないとしたいがためである。とにかく(29)の非文法性は説明がつく。(31)のような疑問文を容認するものについては、(32)との類推現象として説明しようとする。

(31)　?Who did you give the book?

(32)　Who did you give the book to?

そして(33)のような for 句を要求するものは、for の持つ意味からして to の場合のような類推を受けづらいとする。

(33)　*Who did you buy the book?

wh 句移動については一応説明がつくが、ストウェル説も受動変形の説明が苦しくなる。二重に問題があるのである。第一は、動詞の一部に編入して移動するはずのない間接目的語を主語の位置に移動する(30)のような文が頻繁に使われることである。ストウェルは(30)などは(34)から導かれるのではなく、(35)から派生されるのだと説明する。

(34)　I gave John a book.

(35)　I gave a book (to) John.

(35)の to をダミーマーカーだとし、(36)などが許されないのは for がダミーマーカーになれないからだと説明する。

(36)　*John was bought a book.

しかしこのダミーマーカーの性格付けははっきりしない。先に見た(4)のように前置詞句を使う型しか用いないものは、(37)のようには言えないのである。

(37)　*We were suggested a new plan.

suggest に使われる to はダミーになれないことが説明されなくてはならないだろう。

次に、(27)のような構造を基底から与えておくと、直接目的語を移動して(38)のような受動文をつくることは自然であることを予想させる。

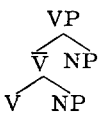
(38)　A book was given John.

ところが事実は、むしろこちらの受動形の方が限られていることは先に見たとおりである。このことをストウェルは、名詞句編入はふつう動詞幹に対してなされるのであり、過去分詞には編入をおこしにくいとし、そのおこる程度は語により、方言によりゆれがあると説明する。たしかに(38)のような受動文の容認可能性にはゆれがあり、個々の語によってもそれが変動することは事実であるが、そこにもある程度の規則性が存在するはずであり、説明としては不十分なものである。そもそもストウェルは、形態論上の動詞と統語論上の動詞を混同しているように思われる。(27)のような構造を考えるとしても、間接目的語を支配する動詞は統語論上の動詞であるはずであり、統語論上の動詞の一部は(39)のように移動することがあるのだ。

(39) Advantage was taken of John.

間接目的語にまつわるさまざまな不規則性を語彙部門の問題としようとすることには一理あるとは思うが、(27)のような構造を考えなければならない根拠はそれほど強いものではないように思われる。give John が give とほぼ同じ分布を示すということ、および受動変形は動詞の直後の名詞句を移動するというように考える時にのみ、そのことがうまくとらえられることだけは確かである。しかし分布の点からするならば次の(40)のような構造も考えられる。

(40)



この構造はチョムスキー（Chomsky, 1981）がとっている分析の一つであるが、この構造自体からは、wh 句移動の制約などは説明されないであろう。さらに(40)のような構造からすると、直接目的語は動詞に対して付加部(adjunct) の位置にあることをふつうは意味する。補部(complement) と付加部の違いを説明するものとして do so テストによる(41)と(42)の違いがしばしば指摘される。

(41) *Mary gave a book to John and Susan did so to Bill.

(42) Mary bought a book for Jack and Susan did so for Bill.

(41)の to 句は動詞の姉妹（sister)、つまり補部であるが、(42)の for 句は最少の動詞句 V̄ には支配されない付加部

だとされるのである。ところが(43)のような文は不可であるから、少なくとも do so テストからは直接目的語が付加部の位置にあることは証明されない。

(43) *Mary gave John a book and Susan did so a pencil.

動詞＋間接目的が一単位を成すことを証明しようとして(44)のような文も考えられている。[11]

(44) John [bought] and [gave Mary] [NP the book which the teacher had recommended to him]

しかしこの文の判断もあまりはっきりしないようである。要するに動詞＋間接目的が一単位と考えられる直接的な統語論上の根拠はあまりなさそうである。[12] むしろ一構成素を成しているとしない方が記述しやすい現象がある。

(45) Max gave Sally a nickel, and Harvey a dime.

(45)の Harvey の後に gave Sally が消去されているとはとれず、and の後に Max gave が消去されているとしか解釈できない。[13] これは(46)と同じような等位構造である。[14]

(46) He took John home and Mary to the station.

さらに次のような等位構造もある。[15]

(47) David bought Mary a stuffed animal and a newspaper for himself.

与格移動規則にかかわる二つの型が並置されているところがおもしろいが、ともかく bought Mary を一単位だとすると、記述がむずかしくなるであろう。このように、動詞句中に階層構造を認めようとすることにも難点があると言える。

ちなみに、イェスペルセン (Jespersen, 1933) は意味の観点から別の直接構成素を考えていたと言えよう。彼は、動詞とどちらの目的語の結びつきがより強いか、つまり省略することが不可能かという観点から分析する。

(48) They offered the butler a reward.

(49) A reward was offered the butler.

(50) The butler was offered a reward.

(48)においては a reward は offered の目的語であるが the butler は offered a reward の目的語であると言う。また(49)では a reward は was offered の主語だが、(50)では the butler は was offered a reward 全体の主語であって、was offered だけの主語ではないと言っている。すなわち、(51)のような基底構造を考えていると言ってよいだろう。[16]

(51) [$_{VP}$ [$_{V}$ offer a reward] the butler]

これは offer the butler a reward の直接構成素は不連続であることを意味し、まさに初期の変形文法が変形という操作を用いて、その不連続性を克服しようとしたことと結びついていく。

三

さて二重目的構造に V NP NP という平板な構造を与えると、第一節で見た統語現象はどのように説明されるであろうか。

wh 句移動に対する制約として、アーリー（Oehrle, 1976）は次のような制約を立てた。

(52) 変項を含む変形が $X—NP_1—Y—NP_2$ という連鎖の NP を移動させる時は、$X—NP_1—Y$ までを変項とみなし NP_2 のみを動かす。

受動変形は構造記述に変項を含まない変形であるので、この制約が適用されないと一応説明される。しかし(52)のような制約はどのような意味を持つものであろうか。この制約はフォーダー（Forder, 1978）の「知覚の方式」に由来する制約と関連するものと思われる。フォーダーは間接目的語がふつう wh 句移動で取り出せないこと、および(53)のような関係節に注目する。

(52) The patient whom the nurse brought the doctor hated rainy days.

この文では、看護婦が医者の所へ連れて行った患者という解釈の方がふつうであり、看護婦が医者を連れて行った患者という解釈はほとんどされないという。解釈する者は give や bring の後に空所（gap）がありうることを予測しても、そこにそれを充たしうる構成素があると、その構成素と動詞を結びつけてしまい、その後に空所を見出そうとするという知覚の方式があることが指摘される。そのような知覚の方式にもとづいてフォーダーは次の(54)のような制約が変形規則に課されるようになったと説明する。

(54) XX 取り出し制約（The XX Extraction Constraint）。文の派生のある段階で、そこに形式上同じ型の構成素が連続し、そのどちらもある変形で移動ないし消去されうるような場合には、変形は最初の構成素には適用されない。

同じ形式の構成素の連続といっても、実際には名詞句の

連鎖か前置詞句の連鎖しか英語ではこの制約の対象にならない。しかし前置詞句の連鎖の方は、あまりはっきりした例がないようであるから、結局、これは名詞句の連鎖の場合を説明する制約になるであろう。ただし名詞句の連鎖についても次のような反例が出されている。[17]

(55) a. Who did John consider an idiot?

b. What did John consider Harry?

consider などの動詞の後にくる二つの名詞句はどちらも wh 句移動変形で移動しうるという点が指摘される。しかし、これは二つ目の名詞句は Pred に支配されていると考えれば、同じ範疇の連鎖ではなくなるから問題にはならない。[18] (55)a のような例も consider NP_1NP_2 型と give NP_1 NP_2 型の統語構造の違いを証明するものであると考えられる。

フォーダーの説は、wh 句移動などに対する制約としてはすぐれた説明であると思う。しかし受動態の方については、過去分詞のすぐ後に空所をつくるように移動がおこなわれるから、あいまいさが生ぜず問題がないとしているが、直接目的語も移動することに触れていないので説明になっていない。実際(56)のようなものは、あいまいであって、空所を過去分詞の後にも間接目的語の後にもとりうるのである。[19]

(56) We were given them as guides.

a、我々には彼らがガイドとしてつけられた。

b、我々が彼らのガイド役をおおせつかった。

しかもXX制約の予想に反し、内部の NP (間接目的) が移動したと解釈することの方がより自然なのである。このようにXX制約として一般化することには問題があるようだ。

間接目的語を wh 句移動で移動しうる人たちがいることはどのように説明されるであろうか。知覚の方式に基づくがゆえに、人によって知覚のし方の程度が違い、それらの人々にとってXX制約なる文法制約をつくるまでには至っていないということになるのであろうか。また第一節の(21)で見たように、直接目的語まで移動しえないように、より厳しい制約を課す人々もいるようである。知覚の方式で説明する人の中には、間接目的の疑問文などは、実際は文法的であるが、言語運用の面から知覚しづらく、容認度が落ちるという説明をしている人もいる。しかし文法的だが容認されにくいと一般に言われている

文[20]とは、はっきり性格を異にしていると思われる。容認するといっても、非常に限られた単純な構造の場合にのみ認めているような場合には、実際は非文法的であるが、言語運用の面で容認可能性が出てくる場合として位置づけた方がよいのではないかと思われる。これは先に触れたストウエルの見解だと思われるし、ホーンスタインとワインバーグ（Hornstein and Weinberg, 1981）もそのような説明をしている。

V NP NP という平板な構造を考えても、wh 句移動などに対する制約に関しては、統語構造から説明ができることを見たが、受動文の説明は簡単にはいかない。give 型と buy 型の受動文の文法性の違いについて、かつてフィルモア（Fillmore, 1965）は to 与格移動規則と for 与格移動規則を別の規則として分け、規則の順序づけで説明した。その説明が今や無理であると判断され、両者に基底から同じ構造を与えておく以上、句構造の違いで受動文の分布の違いを説明することは困難となる。せいぜい、buy 型の間接目的語は厳密下位範疇化にかかわる要素ではなく、そのようなものを受動文の主語にすることをおかしいと判断する人と、形式的に名詞句であればなんでも受動文の主語にする人がいるというようなことしか言えないであろう。そして、そのことは動詞の意味構造とかかわってくる。give の方は、与える人と、移動する物と、受け手の三項が必要な動詞であるが、buy の方は、買う人と買われる物だけが要求される項であると思われる。意味構造の点から、間接受動態の分布を分析していくと、結局、ジャッケンドフ（Jackendoff, 1972）の主題格関係の階層構造（The Thematic Hierarchy）のようなものに行きあたるであろう。当面必要な主題格として次の(57)が考えられる。

(57) 1 目標格（Goal）
2 受益格（Benefactive）

そしてこの順で間接受動態の主語になりやすいと言え、方言によって2の受益格を受動文の主語に受け入れるものと、受け入れないものがあるというような説明になるものと思われる。直接目的語が受動文の主語になる場合も、保留される間接目的語が目標格である方が受け入れられやすいということになろう。

四

第一節で見た統語現象の説明として、最近の格理論による説明が考えられる。その理論の要請からしても［$_{VP}$ V NP NP］とするか［$_{VP}$［$_{V'}$ V NP］NP］とするかで見解が分かれている。

チョムスキー（Chomsky, 1981）は現代英語ではほとんど失われている名詞句の格に基づいた理論を彼の理論の一部にくみ入れている。格の消失ということと大いに関係がある二重目的構造が、その理論の中でどのように扱われるかは興味のあるところである。彼は一般文法理論において格付与に次の五つを認めている。

(58) a、AGR に統率されると主格[21]

b、他動詞に統率されると目的格

c、前置詞に統率されると斜格

d、［$_{NP}$—$\bar{X}$］において属格

e、統率要素によって固有に与えられている格

このうち現代英語に斜格（oblique）や固有に与えられている格を認めるべきかは意見の分かれるところであり、二重目的構造の分析とも関連するところである。そして(59)のような格フィルターを設ける。

(59) 格を持たない音形を持つ名詞句を含む文は非文とする。

格理論には、格は統率要素に隣接するもののみに与えられるという仮定がある。これは(60)bのようなものを排除することを目的とする。

(60) a. John put the book on the table.

b. *John put on the table the book.

これは従来の句構造規則で生成しないように規則を作っておけば問題のないものだが、格理論は、なぜそのような連鎖がないのかに説明原理を与えようと考えられたものである。さて、問題の連鎖にはどのような格が、どのように付与させるであろうか。give John a book の John には構造上の格が与えられるが、a book は give に隣接していないので、固有に格を与えられているとも考えられる。しかし英語で固有に格を与える必要があるのは、この場合だけであり不自然であると言えよう。チョムスキー自身、すべて格を構造から決定したいという考えから、代案として、先に見た(40)のような階層構造も考えている。こうすると John には give が格を与え、book

には$\bar{V}$である give John が格を与えることになる。隣接性は保たれるが、$\bar{V}$も格を与えるというように理論を修正せざるを得なくなる。チョムスキーがそのような構造分析をするのは、フランス語の与格構造の分析などを参考にしているのであるが、英語では$\bar{V}$という構成素を認める強い根拠はないようであることは先に指摘したことである。となると、あとはすべて仮定に基づく空論となる恐れがある。

チョムスキーの格理論が第一節の統語現象にどのような説明を与えるか、簡単に見てみよう。wh 句移動については、後で見るように間接目的語に特別の格を付与するなり、特殊な構造として分析しない限り、なんの説明も与えないと思われる。受動文については一応の説明が与えられる。ラドフォード (Radford, 1981) に従って(61)のような基底構造を考えてみよう。

(61) $[_{NP}\triangle]$ was given $[_{NP_1}$ Mary$]$ $[_{NP_2}$ the book$]$

(61)の NP_2 にはこの段階で(62)のように固有に目的格が与えられるとしてみる。

(62) $[_{NP}\triangle]$ was given $[_{NP_1}$ Mary$]$ $\left[_{NP_2}\begin{array}{c}\text{the book}\\+\text{Objective}\end{array}\right]$

このままの構造では Mary には格が付与されない。過去分詞は格を付与しないからである。名詞句移動がおこって Mary が主語の位置に移動すると、そこで主格が与えられて(63)のような適格な文が生まれる。

(63) $\left[_{NP_1}\begin{array}{c}\text{Mary}\\+\text{Nominative}\end{array}\right]$ was given $[_{NP_1}$ e$]$

$\left[_{NP_2}\begin{array}{c}\text{the book}\\+\text{Objective}\end{array}\right]$ (e=empty)

先の(62)の NP_2 が移動するとどうなるか。(64)のような構造になる。

(64) $\left[_{NP_2}\begin{array}{c}\text{The book}\\+\text{Objective}\\+\text{Nominative}\end{array}\right]$ was given Mary

$\left[_{NP_2}\begin{array}{c}\text{e}\\+\text{Objective}\end{array}\right]$

固有に目的格を与えられていた the book が主語の位置に移動したため、構造上、主格が与えられて格の衝突がおこる。そして Mary には格が与えられないから格フィルターに抵触する。さらに、NP_2のトレースには目的格が与えられていて NP トレース条件[22]にも違反して、結局、(65)は非文となると説明されるのである。

(65) *The book was given Mary.

しかしラドフォードも指摘するように、NP_2 が移動しな

いのは、固有に格を与えられているからであることに依存するこの説明は疑わしいと言える。実際いくつかの条件に違反してかなり悪い文であるはずの(65)を文法的とする話者がいることの説明もつかなくなる。

先に触れたホーンスタインとワインバーグは、まったく別の格付与を考えて第一節の現象を説明しようとする。彼らは、構造は平板な構造を考え、give や bring の後の第一の名詞句には斜格が、第二の名詞句には目的格が固有に与えられるとする。そして consider などの後に続く二つの名詞句には両方とも目的格が与えられると定めるのである。そして(66)のようなフィルターを設ける。

(66) $^{*}\left[\begin{matrix} e \\ {}_{NP} + \text{Oblique} \end{matrix}\right]$

このフィルターはもともとは、(67)のような文を排除する目的で設けられた[23]。

(67) *What time did John arrive at [$_{NP}$ e] ?

そして、前置詞の目的語に与えられる格を間接目的語にも与えることにより、同じフィルターで間接目的語の移動を排除しようとするものである。現在では表面上、失われている斜格を認めることで、体系が明らかになると言いたいのである。問題の wh 句移動については(66)のフィルターで非文法性を直接的に説明してしまうのである。先にも触れたように、間接目的の wh 句移動を認める話者は、単純な文に限り、非文を容認してしまっているのだと説明する。動詞の直後の名詞句を直接目的語と解釈してしまうと、wh 句と結びつくものは間接目的語しかないと解釈してしまうという知覚の方式をもち出している。方言の差は、文法の差ではなく知覚の方式の差であることになる。ストウエルのいう類推作用とほぼ同じことであろう。

さて、現代英語の記述に目的格と区別された斜格を持ち込んでよいであろうか。歴史的には与格で示されていた間接目的語は、直接目的語の前という限られた場所にだけ現れ、それ以外の位置ではすべて前置詞句で表わすようになったため、疑問文にする場合も前置詞を使わなくてはならないという説明が可能であろうが、それを彼らは、間接目的語に斜格を与えることと、格フィルターを使うことで記述しようとしていると言える。しかし、斜格付与には問題があると言わざるをえないであろう。

(68)の me に彼らは何格を与えるであろうか。

(68) He told me.

斜格を与えるとすると(69)が可能だから彼らの理論はくずれることになる。

(69) Who(m) did he tell?

次の(70)のaとbの差がうまく説明されなくてはならないのである。

(70) a. *?Who did he tell the story?

b. Who did he tell that Mary would come?

直接目的語と間接目的語が並んで存在する時の間接目的語だけに斜格が与えられるとするのはアドホックであると言わざるを得ないと思う。このことは次の(71)と(72)に構造の差を認めるかということに関わってくる。

(71) I wrote him.

(72) I wrote a letter.

him と a letter の主題格は違うが（him は Goal，a letter は Theme (or Objective)）句構造その他は同じとみるべきではないだろうか。

彼らは直接目的語が主語になる受動形は非文として説明している。受動変形は、伝統的な考え方に従って、動詞の直後のものが移動するのであり、一見、直後でない(73)などは再分析がおこなわれ、意味上のまとまりがある一つの述語を形成しているとみている。

(73) a. John was taken advantage of.

b. John was talked about.

そして(74)では given Harry が一つの述語と分析されないから非文になるとする。

(74) *A book was [$_V$ given Harry] [$_{NP}$ e]

この説明も、受動化がおこなわれていれば再分析があり、受動化がおこなわれなければ述語としての再分析がないと記述しているだけで真の説明ではない。given Harry で Harry が過去分詞と合体するかどうかが方言によって異なるという説明はストウェルがしている説明であった。

間接目的語に斜格を与えることはしないが、間接目的語の構造そのものを特殊なものとみなし、それを格理論と結びつけて説明する見解が最近出されている。Czepluch (1982) は、間接目的語は空（から）の前置詞に統率されていると考えている。[24] 間接目的語が to 前置詞句や for 前置詞句などと、ほぼ同じ機能を果たすことから、間接

目的語も前置詞句とみてはどうかという考え方である。主要部が空(から)である前置詞句は動詞に隣接した時にのみ格を与えられ、隣りの直接目的語に格が伝達されると規定しておくと、格は統率要素に隣接している時にのみ与えられるという原則が守られ、(75)のような順序づけが自動的に決定されるという。

(75) a. give NP [to NP]
b. *give [to NP] NP
c. *give NP [e NP]
d. give [e NP] NP

要するに、与格移動変形が記述していたことを格理論を使って記述しなおしていると言えよう。間接目的語にwh句移動が適用されたものは、ECP[25]と格フィルターでその非文法性が説明される。受動態については、過去分詞も格を与えるという格理論の修正のもとに、(76)は(77)から導かれると考えるようである。

(76) Mary is given the book.

(77) △ is [$_V$ given the book [Mary]]
+obj

これは先に触れたストウエルの to をダミーとみる説明と同じと言えよう。for 前置詞句の方は、先に見たように$\bar{V}$の中に入っていないために、(78)のような構造をしていて、過去分詞に統率されないので ECP で非文となると考える。

(78) *Mary was [[$_V$ bought the book] [$_{PP}$ e]]

厳密下位範疇化に関与していない前置詞句はダミー前置詞として機能しないとし、それを許す方言は結局 buy も give と同じように二つの NP を要求して同じ構造になっているのだと説明する。つまり、give 型と buy 型の違いは、統語論上は、それがとる前置詞句が、最少の動詞句に含まれているか否かということしかないために、それを受動態の派生にも結びつけようとしているのである。この理論は一見おもしろい説明を与えてくれそうにみえるけれども、あまりに多くの仮定に基づいていて、にわかにその評価はできないが、その意図するところは魅力的であっても、実際の説明は言語事実に都合がよくなるように無理に理論を組み立てているだけという感じがする。

以上、格理論と結びついた考え方をいくつか見てきたが、格理論自体がまだはっきりしないものであり、それ

を現代英語にあてはめることは、あまり生産的なことではないように思う。

五

以上、検討したことを整理して方向づけをしてみよう。そもそもは英語に与格形がなくなったために、直接目的語の前に存在する間接目的語を wh 句移動変形などで移動すると、フォーダーが指摘するように知覚の方式上、空所が認知しずらくなる。しかし、この場合は前置詞句を使えばはっきりさせることができるという手段があったために、前置詞句を使うという規則が英文法内にできたというだけのことであろう。簡単な文で処理しやすいものは、特に to がなくても理解する者もいるという説明でよいだろう。おもしろいことに、(79)に見られるように基底形では to がない場合にも、疑問文ではっきり聞く時には to を補うということがあるようだ。[26]

(79) a. You lent John a hand.

b. *You lent a hand to John.

c. Who did you lend a hand to?

クワーク他（Quirk *et al* p. 844）が指摘する次の例も似た様相を呈すると言えるだろう。

(80) a. You gave the car a wash.

b. *You gave a wash to the car.

c. *A wash was given the car.

d. A wash was given to the car.

これらは基底形を設定し、そこから派生形を生成するという生成文法の考え方では扱えない事柄であろう。英語の話者にとって、与格形をはっきり表わす必要がある時には、基底形とは別に前置詞を補うことがあるようだ。

二重目的語構文にかかわる受動態のさまざまな許容度については、統語構造上からは説明がほとんどできないと言ってよいだろう。間接受動態については方言によって受益格をになう名詞句を主語としてたてられるかどうかに違いがあるようであり、その方向からの分析をした方が有益であると思う。wh 句移動などとの違いは、主語位置では前置詞句を使えないことにある。そのためにあいまいさが生じざるをえない。唯一あいまいさをなくす手段は、直接目的語が主語になった時、動詞の後に残こされている間接目的語に to をつけることであろう。to なしの形を使わない方言はそのような理由によって

いるのだろう。

格を失ったことによる統語現象を抽象的な格を設定して処理することは、そのことにより共時的にはっきりした体系が見えてくる場合以外、差し控えなければならないことだろう。

二重目的語構文の句構造分析において、動詞句内に階層構造をみとめることには、あまり強い根拠もないようであり、平板な構造と考えておいてよいのではなかろうか。

(1) 以下＊は非文を表わす。

(2) 両方の型を使う場合でもa型とb型で意味の差があることも重要な点である。その点に関しては Green (1974), Oehrle (1976) 参照。

(3) 次の(i)のように移動のないエコー疑問文ならば認められる。Kuroda (1968), Jackendoff and Culicover (1971) 参照。

(i) John gave whom the book?

(4) 複雑さとは別の理由で、次の(i)を不可とするようである。Jacobson (1980) 参照。

(i) ＊Who did John give it?

(5) Celce-Murcia and Larsen-Freeman (1983) p. 362.

(6) Hankamer (1973) の判断。

(7) Quirk *et al.* (1972) p. 347 参照。

(8) Brown and Miller (1980) p. 346.

(9) Aという節点にBという要素を付加する時に、Aの上にそれと同じAという節点を作り、それにBを支配させる操作をいう。

(10) 例文は Oehrle (1976) より。

(11) 例文は Miyara (1983) より。

(12) 長谷川欣佑 "Generalized A-over-A Principle" (『英語青年』一九七四年三月号) では次の(i)の文において himself が John と Bill の両方を指せることを説明するためにこの構造が考えられたが、後に「再帰形のシンタクス」(『英語青年』一九七八年十月号) などで規則の修正がおこなわれており、この構造を支持する必要はなくなっている。

(i) John sent Bill a picture of himself.

(13) Hankamer (1973) 参照。

(14) 例文は Gleitman (1965) より。

(15) 小西友七編『英語基本動詞辞典』(研究社出版) 一九二頁。

(16) Dowty (1978) はこのような構造を考えている。

(17) Hornstein and Weinberg (1981) 参照。

(18) この点に関しては拙稿「英語の叙述語句の位置づけをめぐって」『一橋論叢』第九十二巻　第四号 (一九八四年十二月号) 参照。

(19) 例文は Visser (1973) p. 2149 より。

(20) 次の(i)ようなもの。

(i) The horse raced past the barn fell.

(21) AGR＝人称，数，性の素性の束。統率の定義については前掲の拙稿の注(20)参照。

(22) 名詞句移動の後に残る痕跡(トレース)には格が与えられないとする条件。

(23) 前置詞が残っていて文法的な文は，前置詞が述語の中に組み込まれる再分析がおこっているとみる。

(24) Kayne (1983) も似た考え方をしている。ただし彼は V[s PP NP] という分析をする。英語の二重目的構造に文的要素を認めるのは無理であろう。

(25) Empty Category Principle。空節点は語彙範疇に統率され指示を与えられていなければいけないとする。

(26) Otsu (1977) の指摘。

引用文献

Brown, E. K. and J. E. Miller (1980) *Syntax: A Linguistic Introduction to Sentence Structure,* Hutchinson.

——— (1982) *Syntax: Generative Grammar,* Hutchinson.

Celce-Murcia, M. and D. Larsen-Freeman (1983) *The Grammar Book, An ESL/EFL Teacher's Course,* Newbury House.

Chomsky, N. (1981) *Lectures on Government and Binding,* Foris.

Culicover, P. W. and K. Wexler (1977) "Some Syntactic Implications of a Theory of Language Learnability," in P. W. Culicover, T. Wasow and A. Akmajian (eds.), *Formal Syntax,* Academic Press.

Curme, G. O. (1931) *Syntax,* Heath/Maruzen

Czepluch, H. (1982) "Case Theory and the Dative Construction," *The Linguistic Review,* Vol. 2, No. 4.

Dowty, D. R. (1978) "Governed Transformations as Lexical Rules in a Montague Grammar," *Linguistic Inquiry,* Vol. 9, No. 3.

Fillmore, C. (1965) *Indirect Object Construction in English and the Ordering of Transformations,* Mouton.

Forder, J. D. (1978) "Parsing Strategies and Constraints on Transformations," *Linguistic Inquiry,* Vol. 9, No. 3.

Gleitman, L. R. (1965) "Coordinating Conjunctions in English," *Language,* Vol. 41, No. 2.

Green, G. M. (1974) *Semantics and Syntactic Regularity,* Indiana Univ. Press.

Hankamer, J. (1973) "Unacceptable Ambiguity," *Linguistic Inquiry,* Vol. 4, No. 1.

Hornstein, N. and A. Weinberg (1981) "Case Theory and Preposition Stranding," *Linguistic Inquiry,* Vol. 12, No. 1.

Jackendoff, R. S. (1972) *Semantic Interpretation in Gener-*

ative Grammar, MIT Press.

——— and P. Culicover (1971) "A Reconsideration of Dative Movements," *Foundations of Language,* Vol. 7, No. 3.

Jacobson, P.(1982) "Evidence for Gaps," in P. Jacobson and G. K. Pullum (eds.), *The Nature of Syntactic Representation,* D. Reidel Publishing Company.

Jespersen, O. (1933) *Essenltials of English Grammar,* George Allen and Unwin.

Kayne, R. S. (1983) *Connectedness and Binary Branching,* Foris.

Kuroda, S. Y. (1968) Review of Fillmore (1965), *Language,* Vol. 44, No. 2.

Miyara, S. (1983) "Reorderings in English," *Linguistic Analysis,* Vol. 12, No. 3.

Nida, E. A. (1966) *A Synopsis of English Syntax,* Mouton.

Oehrle, R. T. (1976) *The Grammatical Status of the English Dative Alternation,* unpulished Ph. D. dissertation, MIT.

Otsu, Y. (1977) "Dative Questions and Perceptual Strategies," *Studies in English Linguistics,* No. 5.

Quirk, R. *et al.* (eds.) (1972) *A Grammar of Contemporary English,* Longman.

Radford, A. (1981) *Transformational Syntax,* Cambridge Univ. Press.

Stowell, T. (1981) *Origins of Phrase Structure,* unpublished Ph. D. dissertation, MIT.

Visser, F. Th (1973) *An Historical Syntax of the English Language, Part III, Second Half,* E. J. Brill.

(一橋大学講師)